

福山大学 図書館報

Library Announcement,
Fukuyama University

第 4 号
2006.9

<目次>

美しい国、日本	片岡俊郎	1
図書館断想	篠田昭夫	3
インターネットと図書館	川久保和雄	4
買って読む本、借りて読む本	乾靖夫	5
竜馬がゆく	佐久間基	7

図書館からのお知らせ

「チャレンジ・ウィークふくやま」

—大成館中学校 2 年生を迎えて—	8
あの本読みたい！と思ったら	8

美しい国、日本

—経済学者、J.M.ケインズによりながら—
福山大学附属図書館長
経済学部経済学科教授 片岡俊郎

2006（平成 18）年 9 月 29 日、安倍晋三首相は、所信表明演説を行う。「私が目指すこの国のかたちは、活力とチャンスと優しさに満ちあふれ、自律の精神を大事にする、世界に開かれた『美しい国、日本』であります。」

私は、20 世紀の偉大な経済学者の一人である J.M.ケインズの「わが孫たちの経済的可能性」（1930 年）を思い出した。ケインズは、重大な戦争と顕著な人口の増加がないと仮定すれば、100 年以内に経済問題は解決され、あるいは少なくとも解決のめどがつき、豊かな時代が到来した時に、真の豊かさを享受できるのは、活力に満ちた生活術の達人であり、自律した国民であると述べている。

また、高潔な生活術の達人は、物事の中に直接の喜びを見出すことのできる素晴らしい人、汗して働くことも紡ぐこともしない野の百合のような人、として尊敬されるようになる、と。

さらに、経済問題が解決し、あるいは解

決の可能性が見えた時点で、経済学者は歯科医と同様に、専門的な問題に専念し、控えめで有能な人でなければならないとも述べる。



御滝の桜を前景にした、陸奥の国の弘前城

私は、福山大学で地域開発論を担当し、広島県東部のいわゆる備後三市、福山・尾道・三原は、福山市が広島県東部の政治、経済、科学技術、文化の中心都市であり、尾道市は国際観光都市、三原市は自然環境都市を目指すべきであろうと講義してきた。福山市の文化とは、狭義の文化、つまり

精神文化を指し、真善美、いいかえれば真理、善行、美を追求する意味なのである。

尾道市の観光とは、中国の書『易経』にならえば、尾道市の風俗の美を見ることであり、尾道市の徳を最も表現できるのが、自然環境の美と人々の優しさなのである。したがって、尾道市が標榜している「国際芸術文化都市」では、尾道市が市立の大学を擁し、学術・教育を尊重していることを、寺々の都市であるという意味での宗教心をも無視しているのではないかと思えるのである。尾道市が、文学の都市、絵画の都市、映画の都市、すなわち芸術の都市から一步抜け出し、国際観光都市として、尾道市の風俗全体が世界遺産に登録されることを目標にすれば、尾道の国際性は一般性を持つことになるであろう。

三原市の自然環境は、単なる自然環境の美だけを強調しているのではなく、都市を見る場合、産業基盤、生活環境基盤、保健福祉医療基盤、教育文化基盤、行財政基盤、広域基盤を問題にするが、福山市、尾道市に、比較して三原市の特徴を打ち出すとすれば、生活環境基盤の充実に基づく自然環境の美を意味しているのである。その意味において、三原市のキャッチフレーズ「海・山・空、夢ひらくまち」は、自然環境都市を踏まえ、海・空で国際性をも表現し、自然環境の真の保全には、戦争のない平和な社会を築かなければならないことを国際的に表明していることになる。

ケインズは『繁栄への道』（1933年）において、経済理論に政治的手腕を加味した政治経済学の必要性を説くが、ケインズは理論家でありながら実際家でもあるが、国家主義と現実主義が表面に出過ぎ、ケインズには、この時点では、世界主義者、理想主義者の側面が欠けているといえる。

ケインズは「若き日の信条」（1938年）

< 図書館より関連図書のお知らせ >

ケインズの「繁栄への道」「若き日の信条」は『世界の名著 57：ケインズ；ハロッド』（084/S/57）で読むことができます。

において、ケインズが経済学を探究する過程において真理に重きを置きすぎた結果、若き日に重要であると思っていた愛と美に対する関心を失ってきたと述べている。愛と美の尊重は、政治経済学に欠けていた世界主義、理想主義を補うことができると思えるからである。ケインズは、経済学は、最終的には、人間の学としての経済学でなければならない、そのためには、真・愛・美は、三位一体として探究する必要があると説くのである。

わが国、日本の美は、自然環境の美だけではなく、政治、経済、技術、文化の盛況によって判断されなければならないとすれば、政治家、実業家、技術者、学者、芸術家、宗教家、教育者のリーダーシップによることは言うまでもないが、前記ケインズの「野の百合のような人」と「歯科医」のたとえを積極的に読み込めば、われわれには、公と私の世界があり、公における有能な専門家と、私における日常生活の達人が、両者相まって、わが国の活力が維持でき、世界に開かれた「美しい国、日本」が実現するといえるのである。

ケインズが、「野の百合のような人」をあげる上で「汗して働くことも紡ぐこともしない」と述べているのは、私の世界では何が重要であり、歯科医の必要性を説くのは、歯の痛みだけは、がまんできず、痛みを解消してくれる歯科医を通して、公の場における専門家の高度な技術の必要性を強調していると理解できる。

「美しい国、日本」を作るのは、一部の政治家、実業家、技術者、文化人ではなく、一人ひとりの国民が、その責を果たすことによってしか実現しない故に、安倍晋三首相は所信表明演説で国民に訴えたのであろう。



図書館断想

人間文化学部人間文化学科教授 篠田昭夫

明治中期から「図書館」と和訳されてきたライブラリー(library)なる英語は、「書店」を意味するリブラリア(libraria)というラテン語から生まれた言葉である。ということは、これには「図書館」と「書店」とは同一の存在であり、街角の「書店」を訪れるのと同じ気持ちで、立ち読みでもするつもりで「図書館」を気軽に訪れてよい、という事実が示されているといえよう。

私が研究対象としてきた 19 世紀イギリス文学の代表的作家チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)をコンピューターに入力してみると、本学附属図書館に所蔵されている 15 件の関連資料を検索することができた(2006年7月31日現在)。『荒涼館』、『二都物語』や『オリヴァー・トウイスト』といった著名な長篇群に混じって、『炉辺のこおろぎ：家庭のおとぎ話』(*The Cricket on the Hearth: A Fairy Tale of Home*) (伊藤廣里訳、近代文芸社刊、2004年)という、世界最初の本格的なクリスマス作品である『クリスマス・キャロル』と『鐘の音』に続き、三番目のクリスマス作品として、ディケンズが 1845 年 12 月に書き下ろし出版した中篇小説をリスト中に認めたので、以下この作品に焦点を当てて筆を進めることとしたい。

圧倒的な知名度と影響力を持つ『クリスマス・キャロル』と比べると、『炉辺のこおろぎ』が知られざる存在に過ぎないことは指摘するまでもない。

耳の遠い老人を連れて運送屋をしている実直な中年男ジョン・ピアリビングルが帰宅したことから騒動が持ち上がる。老人が若い男の変装



である事実に気付いたジョンは年齢 20 歳のうら若い妻ドットの不倫を疑い、果ては男への殺意すら抱く。

「彼は銃床でドアを叩こうと鉄砲をさかさまにした。すでに空中に振りあげた。後生だから、窓から逃げ出してくれと叫ぼうとする意図が彼の気持の中にあった――

その時、くすぶっていた火が、突然パツと燃え上がり、炉辺全体を明るく照らした。炉辺のこおろぎがリリーンと鳴き始めた!



彼が聞き得たどんな音も、いかなる人間の声も、彼女の声でさえも、それほどまでに、ジョンを感動させ、やわらげることは出来なかったことであろう。この同じこおろぎに対する愛情を彼と話した時の彼女の飾りのない言葉が、もう一度生き生きと語られた。あのときの彼女の体をふるわせながらの、熱心な言葉が、再び彼の前にあった。彼女の心地よい声――おお、正直な男の炉辺で、家庭の音楽をかなでるのに、それは何とすばらしい声だったろう！」(124 ページ)

見事な描写で浮き彫りにされている暖炉で赤々と燃えている火とこおろぎとの一体化した浄化作用により、一夜の懊悩の後黒い影を払拭し得たジョンは妻ドットへの信頼を取り戻すとともに、大団円を迎えることができたのであった。ディケンズは情感のこもったタッチで幻想の世界に読者を誘い、愛と信頼の大切さを説くことを通して、「クリスマスの季節にふさわしい家庭のおとぎ話」(訳者のあとがき)をつむぎ出したのである。

不朽の名作として高い評価を得てきた『クリスマス・キャロル』の巨大な影に覆われてしまって、『炉辺のこおろぎ』が無視されること多く、読まれることが少ないというのは、その出来映えを考えると何とも残念なことである。図書館に所蔵されている本作品を手にとって読もうとする人が現れるのを期待してやまない。それがディケ

ンズというこの巨大な作家の愛好者の誕生と図書館の活況の出現とに少しでも資する

ことができるなら、望外の幸せというものである。

< 図書館より関連図書のお知らせ >

図書館に所蔵しているディケンズの著書は、『デイヴィッド・コパフィールド』（933.6/D/1-5）、『炉辺のおおろぎ：家庭のおとぎ話』（933.6/D）、『二都物語』（908/E/9）などがあります。

また、ディケンズに関する篠田教授の著作図書も所蔵しています。

『人生の戦い：一つの愛の物語』

チャールズ・ディケンズ作；篠田昭夫訳
成美堂 1990.4（933.6/D）

『魂の彷徨：ディケンズ文学の一面』

篠田昭夫著 溪水社 1998.3（930.268/S）

『チャールズ・ディケンズとクリスマス物の作品群』

篠田昭夫著 溪水社 1994.1（930.268/S）



インターネットと図書館

工学部情報処理工学科助教授川久保和雄

われわれが図書館を利用する主な目的は、「調べる」ということと「蔵書を読む」の2つであろう。この2つの目的を同時に満たすことができる場所として、2000年以上もの間、他の追隨を許してこなかった「図書館」に対して、近年新しい強力なメディアが急成長してきた。言うまでもなく「インターネット」である。

例えば「調べる」については、インターネットではキーワードを検索エンジンに与えるだけで、またたくまに膨大な関連ページを示してくれるので、いながらにして世界中の最新の情報を得ることができる。しかも基本的には無料で。

もちろんそのかげには、30億以上ともいわれる世界中のWebページの情報を蓄積して、膨大な検索要求に対して瞬時に目的のページを見つけてくれるコンピュータが、

Googleだけでも数万台、縁の下の力持ちとして働いてくれているおかげであるが、利用者であるわれわれは、パソコンの画面を通じて、まるで全世界が自分専用の図書館になったような錯覚に陥る。

一方、「読む」の方は、まだまだインターネットは図書館の足元にも及ばないが、それでも雑誌の全文が読める電子ジャーナルや、デジタル化された書籍や資料の全文が手に入る電子図書館が、そろそろ現れてきている。次第に日常的なレベルでは図書館に足を運ばなくても、「調べたり」、「読んだり」することができる時代が近づいてきているといえなくもない。

これに伴って、将来図書館は不要になるであろう、などという極論を口にする気の早い人も出はじめている。しかしこれは、新しいメディアが登場するたびに、必ず出てくる議論でもある。

話ははずれるが、関連して思い出すのは、まぎれもなく20世紀最高の天才ピアニストの1人であったグレン・グールドが、録音というメディアによって、生のコンサートはなくなるであろうという、大胆な予言

をしたことである。彼に言わせると、演奏会というのは19世紀の遺物だそうだ。実際彼は、わずか30才を少し過ぎてからは、50才でその生涯を閉じるまで、一切コンサートを開かず、ひたすらレコード録音、ラジオやテレビへの出演、著作に専念して、自分の予言を実践しようとした。

しかし、彼が亡くなって四半世紀が経とうとしているが、コンサートは一向になくなる気配はなく、それどころかますます盛んに開かれるようになっており、満員でチケットを入手するのも難しいコンサートも少なくない。

CDやDVDなら、コンサートのチケットよりはるかに安価で入手でき、好きな時間に、自宅のソファでリラックスして、コーヒーをすすりながら、誰にも遠慮せず、完成度の高い名演奏を堪能できる。にもかかわらず聴衆たちは、時間をかけてコンサート会場まで足を運び、窮屈な椅子に長時間縛り付けられ、せき払い一つするにも気兼ねをしながら、最後には不本意でも、延々と手が疲れるまで拍手をさせられるというのに、わざわざ高額なチケットを苦労して購入してまで、いそいそと出かけて行く。

それは、生の演奏会は、録音メディアにはない、聴衆をひきつける魅力を持っているからだ。いくら過去の最高の演奏がCDに収められているとしても、演奏家と「場」をリアルタイムに共有することによる感動は、CDでは得られない。今後どんなに録音・再生技術が発達しても、コンサートはなくならないだろう。



話を元に戻すと、図書館にもやはり「場」というものが必要であるように思う。知識豊富な図書館員の方々とやりとりの中で、あるいは実際に書架に並ぶ膨大な書籍を見渡して、目にとまった本を手にして、パラパラとページをめくっている内に湧いてくる発想は、パソコンの狭い液晶画面からでは、とうてい得られるものではない。それが図書館の大きな魅力の一つであろう。

今後、インターネットか図書館かというような択一的な議論ではなく、それぞれの得意な面を融合した、総合的な情報収集・提供システムが発展してくれればと、願っている。

買って読む本、借りて読む本

生命工学部海洋生物工学科教授 乾靖夫

いわゆる多読家は次々と自分で本を買って、図書館の本を含めて盛んに本を借りて読む。家中が本で埋まりそうになったり、本の重みで床が抜けそうになっても、次々と新しい本を仕込んでくる。私の仲間にも何人かこういう者がいる。一方、3年間の滞在中に、地域の図書館の大半の蔵書を読んではしまった者もいる。

私も専門分野の論文や専門書は必要に応じて読むし、それ以外の本もそれなりに読むが、決して多読家ではない。それゆえに読書の薦めとかの一文を書くのはおこがましいので、ここでは多少邪道ではあるが最近の私の図書館の楽しみ方を紹介しようと思う。

私は読書に関してかなり妙な癖がある。自分で買ってきた本は、その本が手元にあるというだけで安心するのか、読了するのに時間がかかり、ツンドク、すなわち、積んで置くだけで終わることも多い。逆に人から借りた本は、返さなければというプレッシャーからか、かなり素早く読む。専門

書でもその傾向が強く、かつて研究所に勤めていた時などは、研究者間の本棚に興味のあるのを見つけると、ちょっと拝借して必要な知識を吸収するのが得意としていた。家でも女房が面白そうな本を買ってきたりすると、彼女の読みさしを読み始め、目印にブックマーカーを挟み込んだりするものだから、諍いのタネになることもある。もっとも、彼女も同じことをやるのだから、これはアイコである。

なぜ、このような癖がついたのか考えてみると、どうも子供の頃の本屋での立ち読みに端を発したように思える。本屋の親父ににらまれたり、時にはハタキをかけられたりしながらも、少年雑誌の発刊日を待ちかまえて、ワクワクして立ち読みをしたものだ。戦争直後のことゆえどの家庭もそんなに裕福ではなく、私の母も勉強の本となると、快く財布の紐を緩めてくれたが、いわゆる学業に関係のないものや、少年雑誌、漫画などは特別な時以外はめったに買ってはくれなかった。と言うより、こちらもねだったりする気がほとんどなかったように思う。当時は今のように大型の本屋はほとんどなく、私の住んでいた大阪の真ん中でも、一定の地域に小さな本屋が一軒ポツリとある程度であった。このような本屋では店主の主な仕事は本を買いそうな人間を見分け、立ち読み専門の子供をタイミング良く追い払うことであったようにさえ思う。ともかくいつも惜しい所で追い払われる。そのような本屋の親父の目を盗みながら、



いかに続きものを最後まで読みつなぐか、子供心にその戦略を考えるのも楽しかった。あの時にただ読みの悪癖がついたのではないかと危惧している。

私は長年勤めた研究所を退職後、福山大学に奉職するまでのしばしの間、かつての専門分野だけではなく、広く科学や一般書物を楽しもうと心に決めていた。ところが

本屋に行くともども目移りして、買う本を決めるのにとっても時間がかかってしまう。時には買う本をきめるのが反って苦痛なくらいである。現役の時に立ち読みにフラッと本屋に立ち寄った時の楽しみが感じられない。この時に出会ったのが、私が住んでいる町の図書館である。最近はこの市町村にも、立派な図書館ができています。自宅がある三重県の田舎町もその例にもれない。ここには、本当に色々なジャンルの本が揃っている。雑誌一つとっても純文学、大衆文芸、音楽、美術、園芸、私の趣味のハイキング、テニスをはじめ色々なスポーツ雑誌と。もちろん、ハウツーもの、各種の文庫本や小説、最近話題の読みものなどもほとんどそろっている。図書館にいる間は雑誌を読み渡し、帰りぎわに小説や趣味の読み物を数冊借りてくる。女房も同じことをするものだから、家にはいつもさまざまな本が溢れていた。子供の頃の本屋さんでの立ち読みプラスαの幸せを感じるには充分である。そんなの当たり前だという声が聞こえてくる気がする。その通り、私は図書館の面白さを充分に知らなかっただけのことである。学生時代も研究者のときも、それなりに図書館へ足を運んだ。しかし、当時は如何に効率よく目的とする研究論文や参考書を探すかに明け暮れており、図書館で本屋での立ち読みの喜びなぞついぞ味わったことがなかったのである。

かくして、私の福大での図書館の利用法は少し邪道である。現在、私は因島が主たる勤務地である。本校には週に数回の授業と会議でしか行かない。会議まで時間が空くことが多い。こういう時は図書館が一番である。時間をつぶすつもりで図書館に出かけるが、いつも時間が足りなく、心残りや憎らしい会議にでることになる。私のような図書館利用者にとっては福大の雑誌類はちょっと物足りない気がするが、これは本題ではないのでここでは述べないこととしよう。

君がもし図書館にあまり出かけない学生

だとすると、なにも遠慮することはない、新聞や雑誌のハシゴに図書館に出かけて見ませんか。すると、きっとすぐに今の福大図書には雑誌類や一般の読み物が少ないの

に不満を感じるだろうから、そのときは堂々とリクエストしてこの分野の書架の充実を叫ぼうではないか。

竜馬がゆく

学務部学生課職員 佐久間基

幼い頃から剣道をしていた私は、高校・大学と剣道で進学しました。その中で出会った本が司馬遼太郎著の「竜馬がゆく」です。私は本当に本を読むことが嫌いで、一切本という本を読んだことがありませんでした。しかし、剣道の師匠から読むことの大切さを学び、本を読む決意をしました。

そして、読み始めてから4カ月・・・約3,500ページに及ぶ長編作を、どうにか読み終えることができました。一人の倒幕の志士の活躍というよりも、“坂本竜馬”という男が生まれてから死にゆくまでの生涯を、史実に基づいて淡々と物語っていく大河小説でした。あまりにも長大なストーリーと圧倒的なスケール感に驚かされました。

この本を読んでみて、ちょっとしたサプライズがありました。それは実は坂本竜馬は“長崎の人”だったこと。坂本竜馬というと、高知県の桂浜に銅像が立っているように、土佐藩で大活躍した人物だと思い込んでいました。竜馬は、青春時代は江戸で剣の腕に磨きを掛け、青年期以降は土佐藩



の融通のきかなさに愛想を尽かせ、脱藩してしまい、長崎にて日本で最初の株式会社となった「亀山社中」（後の海援隊）という海運会社を興しました。さらに、長崎には妻・お龍との住まいを構えて安息の場所を得るなど、竜馬自身もこの地をこよなく愛したこと等が書かれてありました。

この本を読んで自分自身に対して新しい経験、また、糧になったことは言うまでもありません。そして、読書の大切さを痛感し、毎日の積み重ねが大切なんだ、ということに改めて感じさせられました。皆さんにも是非よんで頂きたいお薦めの一冊です。

< 図書館より関連図書のお知らせ >

『竜馬がゆく』（913.6/S/1-5）全5巻を所蔵しています。

その他にも司馬遼太郎の著作

『坂の上の雲』（913.6/S/1-6）

『翔ぶが如く』（913.6/S/1-4）

『菜の花の沖』（913.6/S/1-6）などを所蔵しています。



*** 図書館からのお知らせ ***

「チャレンジ・ウィークふくやま」 —大成館中学校2年生を迎えて—



「チャレンジ・ウィークふくやま」とは、福山市の中学2年生を対象に、希望する職場の体験学習をするという福山市教育委員会発の試みです。その試みに対して私達福山大学にも5名の希望者がありました。この5名は8月21日～25日の間に、大学の施設内3箇所を廻り、職場実習をしました。

図書館ではあいにく蔵書点検の真っ最中でしたが、そのお手伝いをしてもらいました。蔵書点検は体力のいる仕事で、参加した5名はみんな其々に、「本は重たい。」「疲れた。」「腰に来た。」と大変苦労したようでした。薬草園では薬草の管理やアロエベラの植付け、因島の内海生物資源研究所では、魚の世話や水質検査を体験しました。

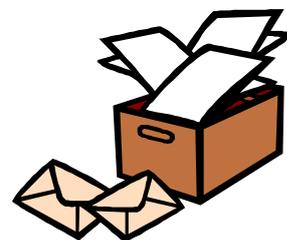
参加した中学生は各々に仕事の大変さを痛感するとともに、働くことへの興味・関心を深めて帰ったことと思います。

「あの本 読みたい！」と思ったら・・・

皆さんが見たい、読みたいと思った本が利用できるように、「**図書購入希望BOX**」を学内5ヶ所に増設しました。読みたい本があれば、BOX備え付けの用紙に記入して投函してください。

購入の可否については、希望者へはメールもしくは電話連絡をするとともに、図書館ホームページの「**図書購入希望申込書 掲示板**」にも掲示します。

- BOX 設置場所：
1. 15号館図書館本館
 2. 10号館薬学部分館
 3. 学生課カウンター
 4. 売店
 5. 女子寮



*** 平成 18 年 11 月 1 日現在までの申込状況 ***

『図書館に入りました。』

- ・ やっぱり学校ってすばらしい 370.4/S <本館・閲覧室>
- ・ レンタルチルドレン 913.6/Y <本館・閲覧室>
- ・ ゲームの世界でいちばんだ! 790/G <本館・閲覧室>
- ・ テツカ・イズ・テッド 726.101/I <本館・閲覧室>
- ・ 稚魚の自然史 487.5/S <本館・閲覧室>
- ・ 法律学における体系思考と体系概念 321.16/C <本館・閲覧室>
- ・ タックスシエルター 345.1/N <本館・閲覧室>
- ・ ほくの話聞いてほしい : 児童性的虐待からの再生 367.63895/J <本館・閲覧室>
- ・ 会計専門職大学院に行こう! 377.21/K <本館・閲覧室>
- ・ 少年への性的虐待 146.8/G <本館・閲覧室>
- ・ 女性状無意識(テクノガイネーシス) : 女性 SF 論序説 904/K <本館・閲覧室>
- ・ 発情装置 : エロスのシナリオ 367.9/U <本館・閲覧室>
- ・ クィア・ジャパン(Vol.2) 変態するサラリーマン表現のセクシュアリティ 367.9/F <本館・閲覧室>
- ・ チャレンジ! わが人生 289.1/T <本館・閲覧室>
- ・ サンカの民と被差別の世界 384/I <本館・閲覧室>
- ・ 平家 上 913.6/I/上 <本館・閲覧室>
- ・ 平家 中 913.6/I/中 <本館・閲覧室>
- ・ 平家 下 913.6/I/下 <本館・閲覧室>



『1号館自習室に入りました。』

- ・ 死ぬかと思った 6
- ・ 死ぬかと思った 7
- ・ ×(バツ)ゲーム
- ・ 漫画同人誌エトセトラ'82~'98 : 状況論とレビューで読むおたく史
- ・ コミックマーケット 30's ファイル—1975 - 2005
- ・ 博士の異常な健康
- ・ 腐女子化する世界 : 東池袋のおたく女子たち
- ・ 息子たちよ



石川県羽咋市に「白石山 豊財院」がある。曹洞宗の禅寺であり、約 700 年前に開かれた。

山門に梵鐘があり、「はんにやの鐘」と言われている。江戸時代、在村の大工が生計のために妻を残して江戸に出た。江戸で愛人が出来、妻への仕送りも途絶えた。妻は疑心を抱くうちに、ある夜、夢をみる。夢の中で思わず夫の咽仏にかみつき、目を覚ます。不思議に思って江戸へ旅立つ、途中、信濃の善光寺へ参詣した時、夫の遺骨を持った愛人に会う。二人は、自分達の罪の深さを悟り、苦勞して浄財を集め、梵鐘にして寺へ寄進し、死んだ大工の霊を生涯弔ったという。

(K)

編集後記

福山大学図書館報第 4 号を読み、利用者の皆さんが、それぞれの図書館利用法を発見するきっかけになれば幸いです。「この本を読んでみようかな?」「ちよつと時間があいたから図書館へ行ってみようかな?」と思ったら、是非図書館へ来てください。図書のリクエストもお待ちしています。

(桑田・明石)

2007年 1月 31日発行

編集・発行 福山大学附属図書館

〒729-0292 広島県福山市学園町 1 番地三蔵

<http://libaxp.fulib.fukuyama-u.ac.jp/>

印 刷 三島プリント株式会社

〒723-0041 広島県三原市和田町一丁目 5-13